

卜居

津村信夫に

堀辰雄

青空文庫

この家のすぐ裏がやや深い谿谷けいこくになつていて——この頃など夜の明け切らないうちから其処そこで雉子きじがけたたましく啼き立てるので、いつも私達はまだ眠いのに目を覚ましてしまふ程だが、——それでも私はその谿谷けいこくが悪にくくなく、よく小さな焚木たきぎを拾いがてらずんずん下の方まで降りていたりする。その谿谷の丁度向う側にある、緑色の屋根をした大きなヴィラが、いまはまだ木の枝を透いて手にとるように見える位。その谷間の雑木林はやつと芽を出したばかりだが、今日なんぞ、そこで焚木を拾っていたら、ぶんとぶよ納ならしいものがいきなり飛んできて、私の顔のまわりにいつまでもつきまとっていた。少しうるさかったが、なんだかちよつとそれに夏の気分を感じて、懐かしくもあつた。——それほどもう夏の或るものがついそこまで来かけているというのに、それを除いたすべてのものにはまだ春さえ充分には行き渡っていない。夜なんぞはこれで想像以上に寒い。いまだつてもこの手紙を書きながら、ファイア・プレースに火を焚いているほどだ。しかしそれは私が昼間谷から自分で採つてきた僅かな焚木でも事足りる、わざわまきざ薪まきを買うほどのこともない……と、まあ、そういった位の余寒さだ。

そう、まだ君にはこの新居のことを話さなかつたね。御想像どおりの、相変らずの不便

な山の中で、それに慣れつこの自分はともかくも、はじめての女房には、いささか可哀そうな位だし、それに家がすこし二人だけで住むのには大き過ぎたけれども、小屋のつくりが（こんなのを端西などで〔Chalet〕というのだろうか）いかにも気に入ったので、思いついて借りた。——本当をいうと、こんな一番山奥の、それにこんな二人きりには少し大き過ぎて持てあまし気味の小屋を、他にいくつもあつた手頃な小屋よりも私に特に選ばせたのは、実はこのファイア・プレエスの傍に二つ三つ無雑作にころがつていた古い櫥かしの木の椅子（昔から私はこんな椅子をどんなに欲しがっていただろう！）と、それからレムブランドの絵なんぞの入った額縁がいくつか裏を向けて埃まみれのまま壁に立てかけてあつた小さな屋根裏部屋となのだ。いくら女房持ちになつたつて、こんな風な一向変らない私を知つて、さぞ君は嬉しがつてくれることだろうな？ それとも少しは私達の行末が気になるでも云うかね？

私はその屋根裏部屋をすぐ自分の部屋にきめて、そこに自分の椅子のすべてと、それから去年火事ですつかり焼いてしまつてから又ぼつぼつと集め出した少数の本の中から、特にリルケのだけを持ち込んだ。これは女房の奴には内証だが、私はこの屋根裏部屋にときどき閉じ籠つては、全く一人つきりで、昔の自分にそっくりそのままの自分に返つて、心

ゆくまで自分の青春に訣^{けつ}別^{べつ}を告げようという陰謀。——が、その代り、階下の、女房と共同の部屋には、女房に買つて貰つたトルストイ全集だの、ジャック・シャルドンの「祝^{エシ}婚^{タラム}歌」や「クレエル」などを積み重ねて、一方、大いに結婚生活者の心理研究もしようという感心な心がけさ。……当分、そんな二種類の自分が、私の裡^{うち}でお互いに勝手勝手に同居しているだろうが、それはまあ仕方があるまい。慾を云えば、かえつていつまでもこうしたままの通りでいてくれた方が自分には何だか面白そうだ。

こんな手紙を君に書きながら、私がいま思ひ出しているのは、二三日前にも読み返したリルケが「マルテの手記」の中でフランス・ジャムらしい詩人のことを書いている一節だ。——「ああそれは何という幸福な運命であろう。先祖代々の家の、物静かな部屋に坐つて、家付きの落ちついた家具に取囲まれながら、まぶしいほどの新緑の庭で^{やまがら}山雀が啼きかわしたり、又、遠くの方で村の時計の鳴るのを聞いたりしているのは。そうやって坐つて、午後の温かな日ざしを眺めながら、昔の少女たちの話を沢山知っていて、そしてしかも詩人であるというのは。そうして自分だつて、もし何処^{どこ}かに——この世の何処か、誰ももう行つても見ないような閉ざされた田舎家の一つにでも、——住むことが出来ておつたならば、彼に似たような詩人にもなれていただろうと思うのは。私にはたった一つの部

屋が（屋根裏の明るい部屋が）ありさえすれば好かつたらうに。そうしたら、私はそこで自分の古い身のまわりの物や、家族の肖像や、書物だのと一しよに暮らしたろう。それから私は椅子や、花や、犬や、石ころの多い小径のための丈夫なステッキも持ったろう。そしてその他には何ももう持たなかつたらう。……が、すべてはそれとこんなにも異つてしまっているのだ。その訳は神様だけが知っていられる。私の古い家具類は、私が預かつて置いて貰つてある或る納屋^{なや}の中で朽ちつつあるのだ。そして私自身はと云えば、ああ私にはこのように屋根さえなく、雨は私の眼のなかにも降るのだ。」

まあ、この世のこんなところに、——こうして自分の気に入った屋根裏部屋をしばらくなりと借りられて、椅子や花や犬などと気持よさそうに暮している、恐ろしく出来損いのマルテといった恰好の自分、——それにしたつて、その気持のいい何もかもがいつまでも自分のものであるわけのものではなく、そんなフランス・ジャムのような詩人になり切れそうな日も、また何と遠いことだ……

が、いまだけはともかくもこうした幸福そうな私達、——この私達には、現在、花だつて、犬だつて、少しも事は欠かない。——例えば、ついこの間、私がすぐ裏の樅^{もみ}の木かげにちよつと目につかないくらいに小さな青い花が一面に咲いているのを見つけて、何の花

だか知らないけれどいかにも可憐かれんだったので、その見本のように一輪だけ摘んで得意そうに持ち帰ってきたら、女房の奴に「あなたが董すみれの花なんぞを摘んできて。それにうちの庭にだつてたくさん咲いているじゃあないの？」と笑われた。なるほどそう言われて見ると、わが庭の隅々にもそれと同じ可憐な花が一ぱい咲いているのに漸と気がついた。それにしても董の花をいままで少しも知らずにいた私の迂濶うかつさ！……だがそんな迂濶なところのある私だけに、いま、——こんな人生のこんな瞬間に、——董の花みたいなものまでもこつやつてしみじみと見て楽しんでられるのだからな、と誰に向つてもなく負け惜しむ。

夕方、女房が食事の支度をし出す頃になると、何処から来るのか、エアデルテリヤの雑種らしい大きな犬が姿をあらわす。人恋しげな女房がそんな犬まで歓待して、家の中へ入れてやるものだから、私達が食事の間、私達の傍に仲間の一人といった恰好で坐っている。しかし、私達が分けてやるものがもう何もなさそうなのを見すますと、私達のこわごわしてやろうとする愛撫には目もくれないで、さつさと外へ飛び出してしまふ現金な奴。もうすこし一しよに居て、こつやつてファイア・プレエスの前で私がまだいくぶん独身者のように、ときどき一人ごとなど言いながら手紙を書き、女房が心もち物足りなそうな顔をして、編み物をしている傍で、ちよつとの間だけでも、こんな少し淋しすぎる一家団だんら

藥いじぎを賑いじぎわせていてくれたら好いじぎかりそうなものだのに。

青空文庫情報

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学16」新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ト居

津村信夫に

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 堀辰雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>